

年中から年長にかけての クラス集団の変化と子どもの発達

Change of a class group and children's development
from 5-year-olds to 6-year-olds at the kindergarten

大 野 和 男
Kazuo OHNO

本研究では、年中から年長にかけての子どもの発達について、クラス集団内の類似性と関連づけて検討した。そのために、クラスの全ての子どもの類似性についての一対比較を保育者に行ってもらい、その評定理由を述べてもらった。

まず、どのような内容のことが子どもたちの様子を語る上で述べられるかということについて、その内容をカテゴリーに分けることで明らかにしようとした。カテゴリーには、「慎重」「まじめ」といった個人的な特徴と、「打たれ弱い」「面倒見がいい」など仲間関係の中で見られる特徴があることが示唆された。特に、ちょっと気になる特徴を持った子どもの場合、それが継続的に語られていた。

また、多次元尺度法を用いた分析によると、保育者にとって、2年間を通じて、印象のあまり変わらない子どもと変わる子どもが存在した。特に、初期の学期に気になる印象がある子どもの場合、それが気にならなくなるということが大きな意味を持つのではないかと思われた。

保育者には、子どもたちの見方について、その時期ごとに保育者の視点、つまり保育にとって大事なことがあり、それに照らし合わせて、似ている・似ていないが判断されるということが推測された。

【キーワード】 子どもの発達, 集団, 保育者

I. 問題

発達について述べる時、年齢や月齢を基準にすることが多い。クラス編成をする場合も、年齢別であることが多い。しかし、年齢や月齢が全ての説明につながらないのは言うまでもない。年齢のことだけを考えても、年齢別クラス編成をした場合、同じクラスにはほぼ1年近い差がある子どもたちが存在することになる。このような様々な子どもたちが存在するクラス集団の中で、クラス全体としても発達し、個々の子どもたちも発達していくことになる。しかし、クラスという集団に所属する子どもが全て同じように発達するわけではない。出発点も異なるし、それぞれが様々な道筋をたどる。

幼児期の子どもにとって、幼稚園で過ごす時間は、家庭で過ごす時間とともに1日のうちで多くの部分を占める。そのことからすると、幼稚園での生活は、子どもの発達にとって、家庭とともに重要な意味を持つ。幼稚園生活を送るようになった子どもは、それまでの家庭中心の生活から集団生活を送るようになり、その中でお互いに影響を与えあって発達していく。子どもは、集団との関わりの中で自己を発揮しながら、特に自己を律する（友定他, 2003）。刑部（1998）は、保育園にお

ける4歳児の「ちょっと気になる子ども」の長期にわたる集団への参加過程を関係論的に分析している。「ちょっと気になる子ども」が気にならなくなっていく過程で起きていたことがその子ども個人の知的能力やスキルの獲得といった変化というよりも、共同体全体の変容によることを明らかにしている。集団の中で、それぞれの子どもがそれぞれの立ち位置で生活し、違った側面を見せることで、その子どもが違って見えることが起こりうるのだ。幼児期には、一個の主体として周囲の世界に旺盛に進出する一方で、周囲とぶつかったり、周囲に支えられたり、周囲を取り囲んだりしながら、他の人たちと一緒に生きていくことを身に付けていく（鯨岡，2001）。

子どもは、日々の生活の中で様々な姿を見せる。時には、発達段階からすると、戻ってしまったかのような姿を見せることもあるだろう。様々な面で、行きつ戻りつしながら、大きな流れとしては発達していくということが出来る。このようなことは、ピンポイント的な観察を行うことで捉えることはできない。たまたま観察したことがその子どもの全体性を現しているとは限らないのだ。子どもはその時々でさまざまなふるまいを見せる。その間には必ずしも一貫性はない（氏家，1996）が、その子の特徴の1つであることは間違いなさだろう。その子らしさは、そういった1つ1つのエピソードの積み重ねによって生まれてくるのであろうし、そこに思い入れがあるはずである。氏家（1996）によれば、「それを排除することはおそらくできないし、排除してはいけないものかもしれない。なぜなら、我々が目の前で展開する出来事を見ていろいろな想像を巡らせることができるのは我々が多くの事実を単に知っているからではなく、そのできごとに深く関与しているからである」。つまり、子どもの全体的な発達を把握するのに最もよい方法を模索する必要がある。おそらく、できるだけ多面的に子どもと関わり、継続的に子どもを見る必要があるであろう。そんな中で、複数の子どもの発達について、把握しているのに最も適した存在は、保育者ではないかと思われる。

上記のことを踏まえ、大野（2005）は、年少・年中各2クラスを対象とし、子どもの発達と集団の変容の関係について検討している。それによると、年長・年中とも、そのクラスに属する子どもについて、保育者の中で1学期より2学期の方がいくつかのイメージにまとまる傾向があり、同じ子どもが1学期・2学期とも似ていることは少なかった。そして、その類似度について、年少では集団に関する言及や保育者との関係についての言及が多く、年中では個々の特性に関する言及が多く見られたという。その理由として、個々の子どもの成長のスピードが異なること、保育者の注目する視点が時期によって異なることを述べている。

さらに、大野（2007）は、あるクラス集団に注目し、保育者の視点を通して、年中から年長にかけての子どもの発達を同じクラス集団内の子どもを比較することによって検討し、クラス集団が形成される時期、即ち、年中児の1学期から3学期で「違う」という評定数の増加する傾向が見られた。2年間を通じた子どもの傾向を見ると、2年間を通じて他の子どもと比較したときに、「似ている」と評定されることの多い子どもと、「違う」と評定されがちな子どもの存在を明らかにしている。全学期を通して「違う」という評定パターンの評定理由は他のパターンと比較すると同じ内容が多かった。それに対して、「似ている」と評定された場合、学期ごとに様々な理由で比較されることが多かった。これらのことから、保育者がまずクラス集団の子どもを見て気になる点に注目し、そのことによって子どもを比較するということを考察している。

そこで、本研究では、保育者の目を通して、子ども同士を比較することから子どもの発達の姿の検討を行いたい。子ども同士を比較することによって、それぞれの子どもを多面的に把握できる可能性がある。保育者は、そのクラスの子どものたちにとって最も身近な存在であり、家族以外

では最も接している時間が長く、縦断的に子どもと関わっている存在である。しかも、家族と違って、それぞれの子どもを把握しているとともに、クラス集団全体も把握している。即ち、クラス集団の中での子どもの位置も同時に把握できる存在である。子どもが園でのスキルを身に付けていくには、そのクラスの保育者の影響があるはずである。保育者の思い入れが、クラス集団を形成するのに重要な意味がある。保育には、保育を支える親や保育者の信念が重要である。大人の側の知識の中核がこの種の子どもや発達に対する見方であり、保育への情熱や関わり方を作り出していることだろう（無藤，1992）。飯島（1991）によれば、保育集団における対人行動は、幼児が環境に慣れるように試みようとする教師がどの程度努力するかによって左右され、保育を受ける子どもの数と保育者の人数との関係、保育者の保育経験や価値観によって異なっているという。保育者は、子どもたちに思い入れを持って接し、一人ひとりの子どもを把握し、クラス集団内での子どもの位置を捉えていると思われる。これらのことを踏まえ、クラス集団の変化を考慮しつつ、それぞれの子どもがどのような発達を示すのかを明らかにしていきたい。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象

M幼稚園のあるクラスの年中（2004年度）から年長（2005年度）の2年間を追跡した。筆者は、この園に週1回程度伺い参与観察を行っており、子どもの様子がある程度把握している。クラスの人数は、年中時1学期の時点で20名（男児13名・女児7名）であった。このクラスは、年少から年中に進級する際、クラス替えがあったため、2004年4月から形成された。途中男児2名の転出があり、年長時3学期には18名（男児11名・女児7名）であった。転入はなかった。途中で転出した2名については、分析から除外した。

2. 調査方法

クラス担任保育者に各学期末に面接を行った。保育経験年数は、調査開始時点で10年以上になる。具体的には、2004年7月（t1）・12月（t2）、2005年2月（t3）、7月（t4）・12月（t5）、2006年2月（t6）の以上計6回である。面接の記録は、筆記によって行った。

保育者に、面接時の学期の時点でのクラス園児について一対比較をしてもらい、各組の園児がどのくらい似ているかを1：「非常に似ている」から7：「非常に違う」の7件法にて回答を求めた。何を基準として判断するかは保育者に任せた。評定の後1組ずつ、どうしてそのように思ったかについて、その評定理由を自由に述べてもらった。

3. 分析方法

子ども同士の比較理由について、どのような内容のことが述べられているのかを大まかに捉えるために、40のカテゴリーを作成した（Table 1.）。カテゴリーの作成に当たっては、実際に述べられた数名分の子どもに対するコメントを参照した。それぞれの子どもの特徴として述べられている内容をカテゴリーに従って、チェックしていった。チェックした後、全体で1%に満たないカテゴリーについては、分析から除外した。したがって、実際に分析に用いたカテゴリーは、34であった。

子ども同士の類似度に関しては、時期ごとに子ども同士のマトリクスを作成し、多次元尺度法を行った。その後、近くに布置された子どもの組におけるコメントについて解釈を行った。

なお、分析には、SPSS 15.0J for Windowsを用いた。

Table 1. カテゴリー表

カテゴリー番号	カテゴリーの内容	カテゴリー番号	カテゴリーの内容
1	慎重 石橋を渡るような	21	器用
2	まじめ 一生懸命	22	積極的 前へ出て行く
3	受け身	23	体を動かす
4	はっきり言えない がまんする	24	リーダーシップ
5	淡々としている 気にしない	25	やさしい
6	物事の善し悪し 曲がったことダメ	26	面倒見がいい 世話好き
7	初めてのことに抵抗を示す 失敗を恐れる 尻込みする	27	中途半端 投げ出す あきらめ
8	引くことができる 受け止める ゆずれる	28	順応性 どこでも誰でも OK
9	先まで見渡せる	29	甘え上手
10	調子に乗る 流される	30	ストレート 口に出せる
11	理解力がある 能力がある	31	素直
12	周りを見られる	32	打たれ強い
13	打たれ弱い くじける 気にする	33	自己主張
14	ものごとに執着する	34	好き嫌い
15	責任感がある	35	集中力がある 根気がある
16	マイペース 自由奔放	36	起伏あり
17	消極的 おとなしい 目立たない	37	口調が強い 押しつける
18	恥ずかしがりや 照れや	38	天の邪鬼
19	起伏がない 平坦 おだやか	39	自分の世界を持っている こだわりがある
20	要領がいい	40	芯の強さ 負けず嫌い

※網掛けのある3, 14, 29, 31, 34に関しては、実際の分析で用いなかった。

Ⅲ. 結果

1. カテゴリー数

のベカテゴリー数は、1324であった(Table 2.)。40のカテゴリーの中で50回以上用いられたものは、「12: 周囲を見られる」「7: 初めてのことに抵抗を示す」「15: 責任感がある」「2: まじめ」「11: 理解力がある」「26: 面倒見がいい」「13: 打たれ弱い」「1: 慎重」であった。学期ごとに用いられたカテゴリー数は、多少の変動はあるものの、どの時期においても250前後であった。いくつかのカテゴリーでは、時期により増減が見られた。例えば、「1: 慎重」「2: まじめ」「7: 初めてのことに抵抗を示す」などは、時期の経過とともに、述べられることが少なくなる傾向が見られた。それに対して、「35: 集中力がある」「39: 自分の世界を持っている」などは、増加する傾向が見られた。

Table 2. 時期ごとのカテゴリー度数

カテゴリー番号	時 期						計
	t 1	t 2	t 3	t 4	t 5	t 6	
1	12	11	7	3	7	7	47
2	10	9	12	12	2	7	52
4	7	8	6	7	6	4	38
5	7	9	7	2	3	9	37
6	6	8	7	6	8	8	43
7	12	12	11	7	9	6	57
8	5	6	5	5	6	7	34
9	4	3	5	6	6	5	29
10	6	9	8	6	6	4	39
11	9	8	9	11	11	7	55
12	8	12	7	14	11	13	65
13	9	10	8	9	10	7	53
15	5	11	13	10	9	11	59
16	13	8	4	7	5	11	48
17	5	4	4	7	3	2	25
18	5	6	7	5	4	2	29
19	6	4	2	3	3	4	22
20	3	6	8	4	3	8	32
21	5	7	3	6	6	3	30
22	7	7	7	8	9	8	46
23	5	3	8	4	6	3	29
24	5	3	5	4	2	3	22
25	7	3	4	9	7	6	36
26	8	8	8	11	10	10	55
27	9	6	6	3	5	8	37
28	3	6	10	7	4	3	33
30	6	8	10	9	8	10	51
32	4	2	5	3	3	2	19
33	6	6	8	9	8	8	45
35	1	9	8	5	10	7	40
36	6	5	3	5	2	5	26
37	3	0	6	3	3	3	18
39	2	5	6	7	8	10	38
40	2	6	5	10	8	4	35
計	211	228	232	227	211	215	1324

Table 3. 子どもごとのカテゴリー度数

子ども	時 期						計
	t 1	t 2	t 3	t 4	t 5	t 6	
a	10	11	9	19	16	15	79
b	8	14	12	14	12	14	63
c	11	11	14	16	10	15	84
d	14	17	7	16	15	11	99
e	9	14	13	11	11	14	69
f	17	13	13	10	8	8	80
g	14	19	17	19	13	17	91
h	6	7	13	9	8	11	74
i	12	7	8	14	12	10	80
j	8	11	14	14	12	6	63
k	10	18	18	14	10	8	67
l	14	16	14	14	16	17	73
m	18	11	13	14	12	16	77
n	12	12	13	8	8	10	56
o	10	13	13	10	12	9	72
p	10	8	12	5	12	9	78
q	16	14	13	10	11	15	54
r	12	12	16	10	13	10	65
計	211	228	232	227	211	215	1324

a～k は男児、l～r は女児を示す。以下も同様である。

次に、子どもによってどのようなカテゴリー内容が述べられているのか見てみよう (Table 3.)。6 学期合計で、1 名あたりのべ平均 73.56 のカテゴリー内容が述べられていた。学期ごとの各個人のカテゴリー数の平均は、15.70 であった。

2. 子ども間の類似度の変化

学期ごとに、子ども同士の組み合わせは、153 組になる。7 件法で評定された子ども同士の類似度の各時期の平均値は、t1 から順に、3.84, 4.24, 4.14, 3.90, 3.67, 3.82 であった。7 件法による評定なので、どの時期においても中央値に近かったことになる。

t1 から t6 の計 6 回の類似度についての評定からマトリクスを作成し、それを用いて多次元尺度法を行った。その結果を示したのが Figure 1. から Figure 6. である。子どもの布置の様子を見ると、全体的に時期によって異なることがわかる。しかし、中には、ほぼ常に近くに布置される子ども同士も存在した。例えば、a・c・l は、どの時期においても、比較的近くに布置されている。彼らは、「力があるものの、慎重であったり、大人しいということで、その力を発揮し切れていない」ということが共通点としてあるようである。また、j・h の組は、t 3 まで、つまり年中時では近くに布置されているものの、それ以後その布置は離れてきている。以下の分析でも述べるが、h に関して、t4 頃から「変わってきた。生活習慣が身に付いてきた」というようなコメントが見られ、h の様子に変化が見られてきたことがうかがえる。そのことにより、2 人の違いが大きくなり、布置が離れたと言えそうである。

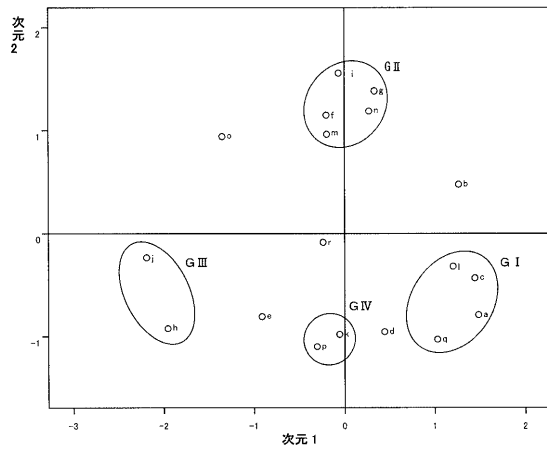


Figure 1. t 1の子どもたちの配置

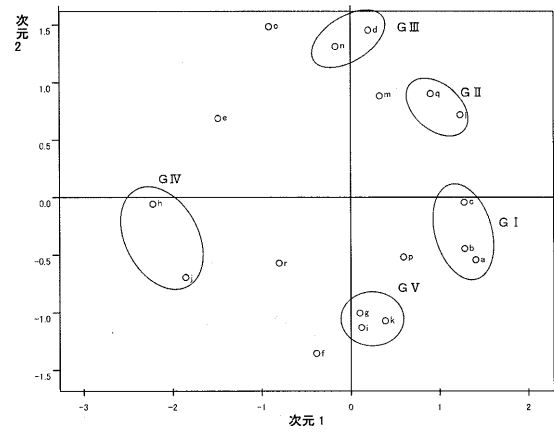


Figure 2. t 2の子どもたちの配置

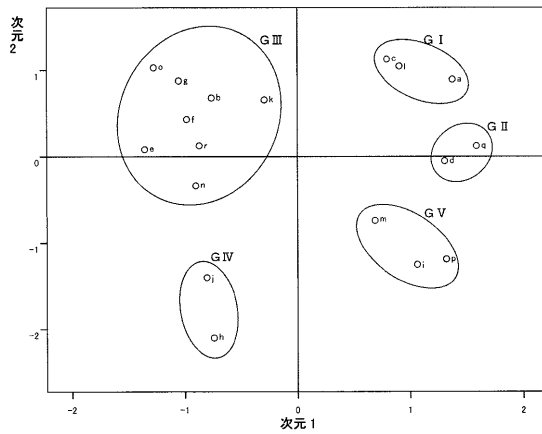


Figure 3. t 3の子どもたちの配置

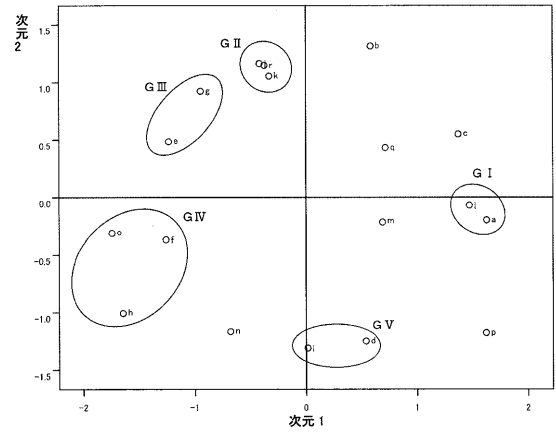


Figure 4. t 4の子どもたちの配置

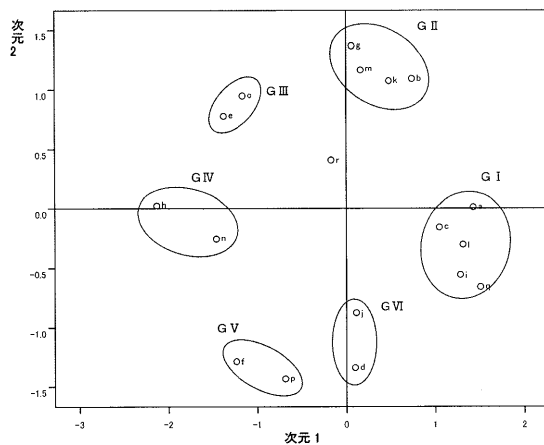


Figure 5. t 5の子どもたちの配置

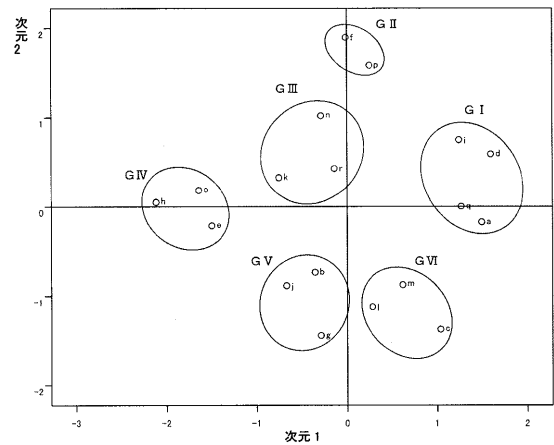


Figure 6. t 6の子どもたちの配置

Table 4. 近くに布置された子どもの組のコメント (t 1)

グループ	子ども		コメント
I	a	e	遊ぶ仲間は全然違う。慎重。何事に対しても堅い。性格的な面で似ている。
	a	n	すごくお互いに現実的なところがあって、周りの状況も捉えられる。nの方が元気。前に前に出てくる。
	a	q	q: 適応するのに時間がかかる。周りを見ながら行動するタイプ。気持ちがいけないと、力はあるが、それを出せなかった。 力はあるが、それを発揮できにくいタイプというところで似ている。言われたことは守ろうとする責任感の強いところは似ている。 お互い照れくさい部分がある。いいものを持っているが、一歩というところで尻込みをしてしまう。
	c	l	体を動かすことが得意。 l: 大人っぽい。醒めたところがある。 2人とも真面目。慎重派。もう一歩出ればさらにいい力が出せる。そこまで続かない。
	c	q	すごくお互いに曲がったことが嫌い。物事の善し悪し、分別ができていて、周りの状況を把握している。伝えてくれる。自分から気づいて手伝おうとする。最後までやり遂げてくれる。2人とも自信を持つと伸びるタイプ。 q: 縄跳びとかで自信をつけてきた。伸びつつある。感情起伏が激しくない。リーダーシップもとれそう。
	l	q	全部ではないが、2人ともまじめに言われることに取りかかると、最後までやり抜ける。あるいは、素直でなく、すれたことも言いつつ、それも本気でなく、運動神経もよく。 l: リーダーシップ q: フォロワー的だったが気持ちという感覚が出てきて、意外と似ていると思った。
II	f	g	2人とも自分のペースで進めていけ、自分のやろうと思ったことに集中して取り組むことができる。友だちに対しても、積極的に関わられるし、2人とも好き嫌いが多少あって、気に入っている子には「いいよ」、そうじゃない子には「ダメー!」。自分がやられると言ってくる。
	f	j	マイペースは似ている。 f: 1年経験してきて、学んできたことで集中して取り組めるようになってきた。 j: 何事に対しても飽きっぽいところがある。
	f	m	2人とも友だちに左右されてしまうところがあり、やればできるタイプだが、お片づけもしなかったり、その場からいなくなってしまうたり、でも制作などに対して、アイデアを持って関わられる面を持っている。
	f	n	f: 友だちに積極的に関わられるようになってきた。 n: クラス替えして、自分のからがあるように友だちに入っていけない。先生には誘ってきたりするが、友だちに言われると、すぐ返事できない。 fは誘われると、友だちを受け入れられる。 n: 何か影をしょっているところがある。一本、強いものを持っている気がする。
	g	i	2人ともけっこう自分中心の所があり、すごく物事の状況によって気分的に波がある。気に入らないと、動かなかったり、いいときは動いてくれる。そういう点で、お互い損をしてしまう。強がってみたり、友だちを受け入れなかったり、周りに気を遣わせるタイプ。やさしい面もあるが、認められにくくなってしまう。
	g	m	2人ともいいときはすごくいいが、調子を崩すと動かない。こだわりがあり、自分が納得するまで、描いたり塗ったりする。手先も器用。すごい力を発揮する。
	g	n	けっこう恥ずかしがり屋な部分があり、素直に表現できないところがある。友だちに対しても仲良しに対してはうまく関わられるが、そうでないと一歩線を引いてしまう。嫌なものは嫌とはっきり言える。口調が強いところが気になるが・・・。
	i	m	似ているところは、自分の気持ちが上向くときには友だちと関わられたり、奇声を上げたり楽しめる。気に入らないと、とことん落ち込んでしまう。立ち上がるまで時間がかかる。頑固な面がある。
	i	n	お互いに目立つことよりも、2人ともこだわりを持っているが、いいときに先生から離れてやれるが、トラブルがあると先生のそばに寄ってくる。自分の中であったことに対処できずに先生に頼る。
	m	n	秘めた強さを感じつつ、新しいことに抵抗を感じる部分があるが、思い通りにいかないとへそを曲げたり、前に進めようとしなかったり、周りのことにすごく敏感なのかなというところが似ている。
III	h	j	マイペースであり、自分の世界で遊んだり、楽しめる。興味があれば、他へいってしまう。周りの状況がどうしても、そっちへ行ってしまう。ある種幸せ、マイペース。2人とも年少さんの時からの知り合い。お互いに譲れる。興味のあるものが共通している。発達段階とかも似ている。雰囲気も似ている。
IV	k	p	2人とも小さい子たちに優しく関わってあげたいという気持ちはあるが、うまくいかないことがある。お互いに1人っ子。愛情はあるが、そういう姿がある。 p: 抵抗を感じやすく、友だちに積極的にいける姿もある。

では、学期ごとに、布置の近い子ども同士をグループとして、その特徴を見てみよう。

t 1 (Figure 1., Table 4.) において、グループ I (G I) は、「まじめ」「慎重」というようなことが述べられていた。グループ II (G II) では、「まじめ」「慎重」「理解力がある」といったカテゴリーが多く述べられているのはグループ I (G I) と共通することであるが、「抵抗を示す」「感情の起伏がある」「打たれ弱い」「マイペース」といったことも多く述べられていた。グループ III (G III) は、「淡々としている」「調子に乗る」「マイペース」というようなことが共通することとして述べられていた。グループ IV (G IV) は、「やさしくて関わりたい気持ちはあるがうまくいかないことがある」ことが述べられていた。

t 2 (Figure 2., Table 5.) において、グループ I (G I) は、「慎重」であること、「初めてのことに抵抗を示す」こと、「理解力もある」が、それが「前面に出ていかない」というようなことが述べられている。グループ II (G II) では、「責任感があり、言われたことを理解する力がある」ことが述べられている。グループ III (G III) では、「周りに敏感である」ことが共通する部分として述べられている。グループ IV (G IV) では、それぞれのペースがあって、「マイペースでやりたいことができる」ことが述べられている。グループ V (G V) では、「要領のよさ」に関してはそれぞれ異なるが、「面倒見のよさ」「周りの状況の把握」といったことが共通することとして述べられる。

Table 5. 近く布置された子どもの組のコメント (t 2)

グループ	子ども		コメント
I	a	b	お互いに慎重なところがあって、はじめてのことに抵抗がある。慣れていければOK。お友達ちに左右されることが多い。
	a	c	お互いに慎重派なところもあり。要領を得ると、行動力を示す。照れ屋、おとなしめだが、ものすごく頭の回転が速い。
	b	c	友だち、周りの状況によって力を発揮する。元々慎重派なところがあって、いくぶんか似ている。
II	l	q	お手伝い、聞かされたことを最後までやれる。責任感あり。言われたことを理解して行動に移せる。
III	d	n	言われたことを守ろうとするd。片づけも一生懸命取り組める。 nも周りに敏感に感じるところもあるが、人に厳しいが、自分のことはできていないこともある。見えてきた2学期。
IV	h	j	お互いに自分のペースがあって、やりたいことをやりたいように行っている。のびのび楽しめるところはいいところ。状況を把握して次に動けない。 j：2学期になって、話を聞く大成ができてきた気がする。同じものにライバル心を持つ。
V	g	i	g：自己主張ができて、やりたい行動もとことん行っていく。何かあっても要領よくその場をクリアできる。 i：バカ正直というか、要領よくいけない。つまづくと抜け出せない時がある。
	g	k	2人とも困っている子に対して、やさしく面倒を見られる。k：一人っ子；g：末っ子→面倒見たいという気持ちがある。手加減しつつ、相手に合わせてあげられる。
	i	k	2人とも周りの状況を気にする。友だちのことを考えて行動する。kの方が強さも備わってきた。何かあったとして乗り越えられる。 i：強さが中途半端。乗り越える前に潰れることがある。

t 3 (Figure 3., Table 6.) において、グループ I (G I) は「まじめ」「理解力がある」こと、「新しいことに抵抗を感じる」ことや「恥ずかしがりや」な点がそれぞれの共通する面として述べられる。グループ II (G II) では、「理解力」や「運動能力」など力を持っているのに、それを「発揮できない」ことが述べられている。グループ III (G III) では、「自己主張が強い」こと、「要領のよさ」、「感情の起伏がある」ことなどが共通して語られている。グループ IV (G IV) では、生活習慣など違ってきたことが前提にされ、「発想のおもしろさ」が共通する点である。グループ V (G V) では、「力はある」のに、「弱いところを持っている」ことが共通して述べられている。

Table 6. 近くに布置された子どもの組のコメント (t 3)

グループ	子ども	コメント
I	a c	真面目で、なかなか曲がったことが許せない。2人とも新しいことに抵抗を感じる。安心するところで前に行ける。
	a l	2人とも言われたことに対して守ろうとする。 lの方が誰にでも関われる。 aは抵抗がある。
	c l	体もきくし、頭の回転というか、先のことも読める。言われなくてもできる。片づけや友だちに対して、できる2人だが、恥ずかしがり屋なところも似ている。
II	d p	自分の意見を伝えられない部分もある。2人とも、思っても、周りの状況によって言えない。遠慮する。 p: 絵を描くことに抵抗を示す。年長さんにあげる絵ができなくて泣いた。 d: 自分で完成できる。
III	b e	2人とも周りの状況によって、おふざけモードになったり、正義感モードになったりする。 b: 周りに壁を作りやすい。 e: 誰とでも関わっていく。
	b f	2人と関わるが多くなり、身体を動かすことで関わる。 b: 自分の思いを伝える。トラブルになることもある。 f: 伝えるようにはなっているが、受け入れることには乏しいところがある。 2人とも友だちが大好きで、前に前に関わっていくところは似ている。
	b g	2人とも自己主張がしっかりしていて、トラブルになることもある。言われたことを受け入れられず、泣き続ける。先生が説得してもダメ。張り切ると、一生懸命やり抜く力は付いてきた。
	b k	b: 自分の意志がはっきりしている。 k: そういうところもある。 b: 素直に伝える。 k: 柔らかく、相手のことを考えて伝えられる。 やろうと決めたときに、積極的に取り組める2人。
	b n	最近要領がよくなってきて、片づけるところから逃れようとする2人。やればできるのに。
	b o	自己主張という場面で、共通する。 17: 口調が強く、善し悪しをがーっと話せる。 2: 大人っぽいところがあって、頭ごなしにというか、同年代と言えないような口調で言う。言葉がすごい。
	b r	理解が早くて、前に進める力が似ている。
	e f	2人とも、周りに左右される。友だちの存在で、気が大きくなったり、凹んだり、わかりやすい。おだてに弱い。それで力を発揮する。
	e g	性格的には違う。制作する力があり、納得するまで時間がかかろうがやる。思い通りにいかないと思えない。根気がある。 e: 黙々とやる。 g: 作りたい発想があると頑張る。
	e k	やさしい2人。周りの状況を見ている。困っている友だちに関われたり、小さい子に面倒を見てあげたり。声をかけたり、そういう姿が似ている。
	e n	要領がいい2人。友だちに言われたことも流せる。根に持たない。
	e o	人に対する口調は違うが、やりたいものをやる時、周りと協力してやろうとする。楽しみながらやれる。
	e r	2人とも、面倒見がよく、誰にでも関われる力がある。

Ⅲ	f	g	誰とでも関わっていけるところが似ている。物事の取り組み。 g: 一生懸命根気よく。 f: あきっぱいところがあって、途中でも、「できた」と満足してしまう。
	f	k	2人とも、友だちと体を動かして遊ぶ。体を鍛えることに興味がある。年長さんと逆立ちをしたり、一緒に関われる。不器用だが、小さい友だちに対しても関われる。飽きるところも似ている。
	f	n	要領がいいところが似ている。話も中途半端に聞いていたり、片づけもやらずに済んでしまったり、うまい。
	f	o	自分の思いを伝えられる。トラブルになるときもある。意思表示がはっきりできる。
	f	r	自分から声をかけて誘える。前に前にという積極的なところが似ている。
	g	k	体を動かしたり、友だちと関わるのが好き。 k: 周りを判断して声かけする。 g: 自分が思うがままの気持ちをぶつける。
	g	n	2人とも要領がいいところ。言われても切り返せる。先生に助けを求める。ある種の賢さが似ている。要領もいいところ、強さも似ている。友だちを許せない。被害者意識が強い。
	g	o	自分のやりたいことをして、力を発揮できる。リーダーにもなれる。思いを伝えられる。強すぎてトラブルになることもある2人。いろんなことがわかっていて、細かいところまで知っている。そういう点も似ている。
	g	r	自己主張がしっかりできる。やりたいことを根気よくやり遂げる。
	k	n	最近要領よくなってきた2人。体を動かすことが得意ではないが、一生懸命練習をする。負けず嫌いの所も似ている。
	k	o	性格的には似ていないが、2人とも、人と関わるのが大好き。一緒に取り組むとか、必要とされると力を出し、進められる2人。
	k	r	誰とでも関わっていける2人。 rの方が思い通りに行かないときもろい。3学期、バスになり、母が迎えに来ない。泣いたり、不安定になってきた。 k: 男の子の仲間ができて、口調も男の子らしくなってきた。行動も荒っぽくなったり。
	n	o	要領のいい2人。自己主張・思いを伝えられる2人。
	n	r	2人とも、要領のいいところ。誰とでも関われる。いわれたことも、80%くらい乗ってあげばいいのかな。ストレスのたまらない秘訣かな？
	o	r	2人とも、思っていることを口に出して友だちに伝える。受け入れられないと、抜け出したり、泣いて反撃したり。そういう強さもあるところが似ている。
Ⅳ	h	j	だいぶ違ってきた。前は似てた。 jの方がいろんなことがわかってきて、今やることがわかってきた。 hのフラフラが気になる。口を出したり。何もしないので、jが手が出る。トラブルになる。 j: 生活習慣が身に付いてきた。発想のおもしろさが似ている。生活面で差が出てきた。
Ⅴ	i	m	2人とも線が弱いところがある。言われたとき、はい上がれない。先生に助けを求めてくる弱さ。話も聞いていて、周りをよく見ているところも似ている。
	i	p	2人とも、やればできるが、一歩踏み出す勇気がない。もったいない、2人とも。損をしてしまう。
	m	p	最近、おうちでも遊ぶ。2人とも、精神年齢の弱さが共通する。頼まれたことをやりたい。小さい子、シールノート、お世話を焼くのが好き。

Table 7. 近くに布置された子どもの組のコメント (t 4)

グループ	子ども		コメント
I	a	l	2人とも落ち着いて取り組める。恥ずかしがり屋な部分がある。自分の意見が表に出せない部分がある。リーダーシップがとれそうな感じ。現実的に物事を把握している。
II	j	k	2人とも、小さい子に優しく、面倒見がいい。
	j	r	2人とも友だち大好きで、積極的に関われる。気に入らないと、伝えられる。トラブルになることもある。 j:丸く収めるために、働きかけてくれる。やることにトゲが立たない。
	k	r	2人とも、面白いところに観点を当てて、気づいたりする。独自の発想を繰り広げる遊びや活動ができる。
III	e	f	お互いに自分がこうしたい、こうしてほしいとか、譲ることができない、引けない。主張が強いところが似ている。
IV	f	h	世界は違うが、ムシとか小動物に関われる。世話をしていける。
	f	o	友達同士の関わりでトラブルが起きる。事細かに状況を見ていて、説明してくれる。周りをよく見ている2人。自分の思いや考えもあり、自分の中での思い、を語り、ますますトラブルが大きくなったりする。見ていないのに、説明を加えてしまう。
	h	o	2人とも自分の思いがあり、通らなかつたりするとき、 h:いじけて倒れる。 o:泣いて主張する。 受け入れて解決してこうしようという方向に行かない。
V	d	i	2人ともちょっと波があるところが似ている。いいときには、友だちにも、活動にも関わっていきける。気持ちが乗らないと、集団に入り込めない。そういうところが似ている。

t 4 (Figure 4., Table 7.) において、グループ I (G I) では、「集中力」もあり、「リーダーシップをとれる」力を持っているのに、それを「出せていない」ことが述べられる。グループ II (G II) では、全体的に見て、「やさしさ」や「友だちとの関わりを好む」ことが述べられている。グループ III (G III) では、「自分の思い」があり、それを「うまく処理できない」ことが述べられている。

t 5 (Figure 5., Table 8.) において、グループ I (G I) では、「慎重である」こと、「理解力がある」こと、「リーダーシップをとれる」こと、「弱いところがある」ことなどが多く述べられている。グループ II (G II) では、「周りの状況を見ることが出来る」こと、「行動力がある」ことなどが述べられている。グループ III (G III) の2人は、「自分の思いがあり、引くということができない」ということが2人の似ている部分である。グループ IV (G IV) の2人は、「周囲の様子によって自分を表現できたりできなかったりする部分がある」ことが共通している。グループ V (G V) の2人は、「集団遊びを好む」ことが述べられている。

Table 8. 近くに布置された子どもの組のコメント (t 5)

グループ	子ども	コメント
I	a c	2人とも行動力, 理解力もあり, 先頭になってやっていける。
	a i	何か不安なことがあるとき, 単独でかかっていけない。誰かの力を借りないと行けない気の弱さが似ている。
	a l	2人とも, 行動力もあって, やるべきことを最後まで行える2人。照れ屋の所も似ている。
	a q	2人とも慎重で照れ屋。初めてのことに抵抗を示す。始めると最後までやれる。
	c i	新しいことに取り組むとき, 抵抗を示す。力を持っているが, なかなかそこに行くまで時間がかかる。
	c l	性格的・運動能力的にも似ている。言われなくても, 自分たちで行える。リーダーとして活躍してくれる。
	c q	2人とも, 最近集団遊びに取り組める。友だちと関わるのが楽しい。いい考えを持っているとき, 必要なときに出してくれる。
	i l	この2人は, できないことに対してうちに帰ってからでも, 地道に頑張る。負けず嫌い。
	i q	2人とも, 友だちのことは, 先生のいったことを受け止めすぎて, 動けなったりする。次の転換がうまくいかないことが多い。
	l q	2人とも, 体を動かすことが大好き。この関わりが多い。レベル的なもの(運動能力など)が同じ所にいる。一方が強いとややこしくなるが, 2人とも弱いところもあり, 言えるところもあるので, 性格的なものも似ている。
II	b g	2人とも頭の回転が速く, 白黒はっきりしないときがすまない。話を聞いていて, 理解できる。
	b j	行動力のある2人。 b: 白黒はっきりさせないと気が済まない。 j: 誰にでも優しく関われる。やるべきこともやれる。
	b m	困難なことにぶつかったとき, はい上がるのに時間がかかる点が似ている。
	g j	周りの状況を把握していて, 言われなくてもやっていける。最後まで責任持って行えるところも似ている。
	g m	こだわりを持っているというところが似ている。2人とも絵を描いたりが好き。見たままを描いていく力が優れている。納得するまでやれる根気強さ。
	j m	2人とも, 友だちが大好きで, 関わることに意欲的。mのが何かあるときに伏せがち。周りから包んでくれる感じ。
III	e o	2人とも自分の思いを持っているので, 周りに勢いでいう。思いが通らないと泣くe。言い続ける。 受けて引くというのができない。
IV	h n	周りのことを気にせず, やりたいように楽しめる点は似ている。
V	f p	p: 友だち関係が安定することによって, 思いを伝えたり, できるようにはなってきた。場の状況, 友だちによって出せたり, 出せなかったりが似ている。
VI	d k	体を動かした集団遊びが好き。ルール, 関わりのあることに関わる姿が見られる。

t 6 (Figure 6., Table 9.) において, グループ I (G I) では, 「周囲を見ることができ」ことや, 「友だちとの関わり」について多く述べられている。グループ II (G II) の2人は, 「友だちとの関わりを好む」ことが述べられている。グループ III (G III) では, 「周囲との関係」について述べられている。グループ IV (G IV) では, 「自己主張の強さ」について多く述べられている。グループ V (G V) では, 「自分のこだわりがある」ことがどの組み合わせでも登場する。グループ VI (G VI) では, 「理解力」・「運動能力が優れている」こと, 「根気のよさ」などが共通して述べられている。

Table 9. 近くに布置された子どもの組のコメント (t 6)

グループ	子ども		コメント
I	a	d	物事をよく見ていて、活動を行っていくのは似ている。 aの方が周りのことを気にする。 d: 周りがどうであっても自分は自分。
	a	i	物事を慎重に考えて、行動するところが似ている。
	a	q	2人とも、自分の思いを伝えることができるようになってきた。やるべき所もきちんと最後までできる。
	d	i	2人とも、意外とひとりでも遊べる。友だちとの関わりでも遊べる。友だちとの関わりでこだわりがないところが似ている。淡々としている点が似ている。
	d	q	2人とも、最初抵抗を感じるが、やり始めると、集中していける。途中、何かあると投げやりになりやすい。
	i	q	2人とも頑張りや。黙々練習する。友だちとの関わりの中でも、出しゃばることなく、調和ができる。
II	f	p	2人とも、友だちとの関わりが楽しい。誰かを誘って、2, 3人の中で関わりを持ったり。いてくれることで安心できる。居心地のいい場を求める。
III	j	n	いろんな話をしてくれたり、周りを見ていて、けんかをしていたらどうにかしようと話しかける。その時に合わせた関わりができる。
	j	r	2人とも、困っている友だちをほっとけず、世話を焼けるやさしさの面で似ている。
	n	r	自分本位というか、マイペースなのに、ちょっと主張があったりするところが似ている。
IV	e	h	2人とも自分のベースがある。誰にでも、ことばをかけたり、関われる。これはいい面。
	e	o	自己主張が強く、周りとのトラブルが多くなる。友だちにも、敬遠されてしまうことがある。
	h	o	この2人は、豆知識というか、いろんなことを持っている。 hのが相手のことを考える。 oも、そういうこともできるが、自分の気持ちを優先してしまう。
V	b	g	2人とも、自分の考えを持っていて、ものを作るにしても、こだわりを持って作り上げる。
	b	k	みんなで何かやる時、自分の中でのこだわりがある点が似ている。
	g	k	12も、自分の中でこだわりがあるときは曲げない。 8: 自分のイメージに合わないとき、新たにやり始めたりするほど、こだわりがある。
VI	c	l	運動能力的にも優れている。何をやらせても、そつなくこなしていける。
	c	m	2人とも、根気があって、いいと思うまでやり遂げられる。
	l	m	真面目に根気よく最後まで取り組める2人。頭の回転もよく、状況を把握していける2人。

IV. 考察

本研究では、年中から年長にかけての子どもの発達について、クラス集団内の類似性から検討した。

まず、どのような内容のことが子どもたちの様子を語る上で述べられるかということについて、語られた内容をカテゴリーに分けることで明らかにしようとした。カテゴリーを見ると、「慎重」「まじめ」といった個人的な特徴と、「打たれ弱い」「面倒見がいい」など仲間関係の中で見られる特徴があることが示唆された。大野（2007）でも検討されているように、ちょっと気になる特徴を持った子どもの場合、それが継続的に語られる。そのことに注目しやすいのか、どの子どもと比較しても繰り返し同じことが述べられる傾向がある。言い換えれば、気になる特徴を持った子どもの場合、使われるカテゴリーが少ないということである。例えば、hの「マイペースさ」、oの「口調のきつさ」などである。このことは、他の子どもとの類似性にも影響していると思われる。その気になる特徴と「違う」ということで、比較される子どもについてもそのことが比較内容として語られやすくなるのだ。

また、変わる子と変わらない子がいることで、似ている子どもの組み合わせが変化することが示唆された。例えば、hとjは、t 1・t 2の時点では、かなり近い位置に布置されていた。保育者

によるその学期のコメントから察する限り、保育者にとってどちらも気になる存在であったと思われる。それが、時間の経過とともに、離れたところに布置されるようになっていく。hに対するコメントについては、全学期を通じてあまり変化がない。それに対して、jに関するコメントの中では、t 3くらいから「変わってきた」とか、「生活習慣が身に付いてきた」ことで「hのしていることが気になる」ということが述べられるようになっていく。

逆に、多次元尺度法による学期ごとの布置を見ると、比較的近くに布置される子どもも存在した。そういった場合、述べられる内容にもあまり変化が見られなかった。例えば、a・c・lなどである。彼らは、「まじめ」「慎重」「理解力がある」というようなことが繰り返し述べられていた。

これらのことから、保育者にとって、印象があまり変わらない子どもと、2年間を通じて変わる子どもがいるのではないかと思われた。特に、初期の学期に気になる印象がある子どもの場合、それが気にならなくなるということが大きな意味を持つということが考えられる。また、他の子どもが様々な意味で変わっているのに、あまり印象が変わらなければその違いはより大きくなるだろう。保育者にとって、こうあってほしいという願いの方向が存在すると思われる。それが即ち子どもが発達していく方向だと言うことができる。保育者は、時期に照らし合わせて、つまり時期によって保育者の視点、つまり大事なことがあり、それによって似ている・似ていないが判断され、個々の子どもの特徴を捉えているということが推測できる。

これらのことをさらに検討するためには、年少を含めた他のクラスにおいても、検討を重ねる必要があるだろう。

謝辞

M幼稚園の先生方にはいつもお世話になっております。本研究で分析させていただいた以外の先生方にも、貴重な時間を割いてお話しいただいたことを深く感謝申し上げます。

文献

- 刑部育子 1998 「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析 発達心理学研究, 9, 1 - 11.
- 飯島婦佐子 1991 3年保育児と2年保育児の対人行動 日本発達心理学会第2回大会発表論文集, 158.
- 石村貞夫 1998 SPSSによる多変量データ解析の手順 第2版 東京図書.
- 鯨岡峻 2001 人とのかかわりの育ちを見る視点 森上史朗・吉村真理子・後藤節美(編) 保育内容「人間関係」 ミネルヴァ書房.
- 無藤隆 1992 子どもの生活における発達と学習 ミネルヴァ書房.
- 大野和男 2005 保育者の視点から見たクラス集団： 類似度による子どもの発達と集団の変容 松本短期大学紀要, 14, 1 - 12.
- 大野和男 2007 年中から年長にかけての幼稚園での子どもの発達： あるクラス集団における子ども同士の比較からの検討 松本短期大学紀要, 16, 5 - 18.
- 友定啓子・丸田愛子・高木勲・武宮道子 2003 幼児期における集団活動の成立： 個の充実から集団意識へ 山口大学研究論叢, 52 (3), 85 - 100.
- 氏家達夫 1996 子どもは気まぐれ： ものがたる発達心理学への序章 ミネルヴァ書房.